

一般演題) 本邦で分離されたメタロ-β-ラクタマーゼ産生大腸菌についての検討

<sup>1</sup> 東北大学大学院 医学系研究科 感染制御・検査診断学分野、<sup>2</sup> 株式会社ビー・エム・エル、

<sup>3</sup> 東北大学大学院 医学系研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科、

<sup>4</sup> 東北大学大学院 医学系研究科 感染症診療地域連携講座

○矢野 寿一<sup>1</sup>、小川 美保<sup>2</sup>、遠藤 史郎<sup>1</sup>、金森 肇<sup>1</sup>、角田 梨紗子<sup>3</sup>、猪股 真也<sup>1</sup>、霜島 正浩<sup>2</sup>、  
石橋 令臣<sup>1</sup>、青柳 哲史<sup>1</sup>、八田 益充<sup>1</sup>、具 芳明<sup>4</sup>、山田 充啓<sup>4</sup>、徳田 浩一<sup>1</sup>、國島 広之<sup>4</sup>、  
北川 美穂<sup>1</sup>、平瀧 洋一<sup>1</sup>、賀来 満夫<sup>1</sup>

【はじめに】カルバペネム系薬は、重症感染症やESBL産生菌感染症などに用いられる重要な薬剤である。従って、カルバペネム系薬を加水分解するメタロ-β-ラクタマーゼを産生する菌は臨床上問題となる。今回、本邦で分離されたメタロ-β-ラクタマーゼ産生大腸菌について検討した。

【対象と方法】2011年2月～7月までに本邦で分離されたCAZ耐性または中等度耐性大腸菌のうち、SMA試験陽性であった54株を対象とした。微量液体希釈法による薬剤感受性試験、PCRおよびシーケンスによるβ-ラクタマーゼ産生遺伝子（IMP-1, IMP-2, VIM-1, VIM-2, KPC, CTX-M, TEM, SHV）の検出と型別、PFGEによる菌株型別を行った。

【結果と考察】PCRの結果、全54株がIMP-1陽性であったが、IMP-2, VIM-1, VIM-2, KPCは全て陰性であった。さらにシーケンスの結果、54株中49株がIMP-6、5株がIMP-1であり、これまで本邦で優位とされてきたIMP-1からIMP-6へとシフトしてきていることが示唆された。また、IMP-6陽性49株のうち全株がCTX-M陽性、23株がTEM陽性でSHVは全て陰性であった。PFGEの結果、全国的には株間の相同性は低く、同一クローン株の拡散は認められなかった。薬剤感受性試験の結果、IMP-6陽性株はIPM 100%, MEPM 71.4%が感性を示し、一般病院細菌検査室におけるIMP-6産生菌の検出が困難であることが示唆され、今後、新たな検出方法の開発が必要と考えられた。